



啐啄同時（そったくどうじ）について



ワープロで“k i t u t u k i”とローマ字入力して変換すると、啄木鳥と出てくる。石川啄木は、なぜキツツキなのだろうと思う。啄木は、岩手県の玉山村渋民の生まれで、現在ここに石川啄木記念館がある。電話で「啄木の名の由来は、キツツキと関係あるのか」と記念館の学芸員に尋ねてみたところ、次のようなお話を下さった。

・・・盛岡中学校を退学して上京した啄木は、東京でホームシックか何か心の病気になり、親のすすめもあり帰郷した。療養の部屋にあって啄木は、カンカンとキツツキが木をつつく高い音が、村中に響き渡るのを聞いた。キツツキは去っては又戻り、カンカンという音を響かせた。啄木17歳頃のこと、この体験から名をとったとエッセイの中で記している。・・・

記念館のHPによると、啄木は、14歳のころ、英語力の向上を目的に学習会「ユニオン会」を主宰している。また、このころ新聞に短歌を投稿し、作品がはじめて活字になっている。文豪として立身すること志した啄木は、上京して与謝野鉄幹・晶子夫妻と知り合いになる。短期間で帰郷することになるが、その後、17歳にして岩手日報に評論「ワグネルの思想」の連載を開始。19歳で堀合節子と結婚し、同時期、処女詩集「あこがれ」を発刊する。27歳で夭逝。歌集「悲しき玩具」は、死後の刊行。啄木は、早熟の天才だった。



啐啄同時とは、禅の言葉である。鳥のヒナが卵の殻を破って出ようとする瞬間、内側からヒナが殻をつつくのが「啐」で、それに応じて親鳥が外から殻をつつき孵化を促すのが「啄」である。このタイミングが合わないと、ヒナは死んでしまう。禅の世界では、「ヒナと親鳥」の関係が「弟子と師匠」に置き換わる。師匠から弟子へと佛法を相続・伝授するとき、伝えられる佛法をコップの水に例え、「一器の水を一器のうつわに移すがごとく」と表現するらしい。弟子の器が小さすぎると佛法はこぼれてしまう。大きすぎると、弟子は物足りないと思う。師匠の悟りと弟子の悟りの力量が同等でなければならない。そういう意味だそう。

悟りがどういうものか分からないが、若いお坊さんが、修行を通して、難しい仏教の概念的なことを頭の中で明快に理解できたことを知覚する瞬間があるのだろう。師匠の行う「啄」もどういうものか分からない。おそらく、問答であったり、一喝であったりするのだろう。その結果、昨日まで解けなかった算数の問題が、今日不思議にサラリと解けたときのような感じで悟るのではないか。その瞬間は、人間の理性が次のステージに移るときで、ヒナの孵化にイメージが重なる。いずれにしても、「啄」のタイミングが決め手になる。早すぎても遅すぎても、ヒナを死なせてしまう。親鳥は、卵を抱いて絶えず観察しているから「啐」に気付く。



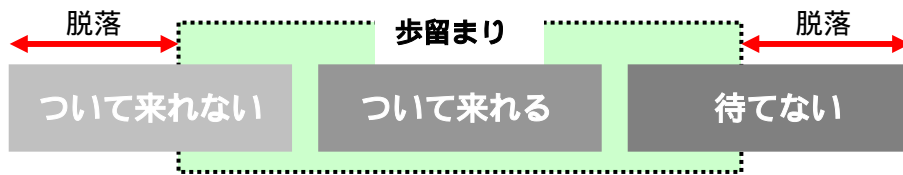
地域づくりに関わる人の言うことが、だんだん宗教がかってくると、「あー、この人もいっちゃったな」と思われるが、それは望まない。啐啄同時という言葉を用いて、行政運営における住民参加について考えていることを述べたい。それが、今号の主題である。

健康福祉計画、子育て支援計画、まちづくり条例など、様々な計画づくりの過程に住民が参加することが増えてきた。このとき、コンサルタント、ファシリテーター、そして実質の企画

責任者として心がけていることがある。それが、啐啄同時である。

例えば、まちづくり条例策定の場合、このワークショップに参加する住民の中には、元行政職員で条例文章の法的表現も、議会への案の上程手続きも熟知した人がいる。他方、まちづくりに対する自分の思い入れや郷土への愛着を語り合いたいだけの人もある。さらには、とにかく行政を糾弾してやろうという思いでやってくる人もある。という具合である。

熟知派の人は、さっさとタタキ台を示して、条例の細部を議論すべきだと主張し、そのようにすれば、愛着派は議論について来れないし、糾弾派は面白くない。その結果、必ず脱落者が出る。業務を請け負ったコンサルタントとしては、歩留まりが気にかかる。



ワークショップを重ねる中で、住民が「啐」の音を発する。例えば、進め方、採用したワークショップの手法がまずいのではないか。議論が進展しないのは、手法がまちがっているからだ。と言い出したときには、それが「啐」であり、「啄」のタイミングである。手法の間違いでなく、参加者に専門知識が不足し、または、まちづくりを語る語彙が不足しているのである。このとき参加者は、「啐」として「勉強して、明快に語る語彙を身に付けたい」という段階に達しており、「啄」としては、「まちづくりとは」「条例とは」「条例の上程とは」「アダプト制度とは」というような基礎的な学習の場を設けることになる。理想は、こうした学習を経て、にわか専門家でもいいので参加者の語彙を増やした上でワークショップをするべきであろう。

先行事例を示すことも有効な「啄」になる。このとき、一度に2つの事例を示すことが重要である。2つあれば、そこに軸が生まれ、それを基準として自分が求めている「まちづくり条例」の方向を見出すことが容易になる。「事例Aよりは大きい」とか「AともBとも違う」とか、そのような共通の言葉で、住民同士の会話が成立するようになる。

だったら、そのようなものを最初から示せばよいではないか。すればよいではないか。ということになる。しかし、そうすると「行政の誘導である」という批判や警戒心が出てくるし、事例を示しても、それを学ばない。最初は、自分の活動や思い入れが、主張の軸になる。

まだ力のないヒナのうちに、いくら外からつついてもダメなものはダメである。最悪、ヒナを死なせてしまう。だから、住民参加のワークショップを企画・運営する者は、卵を抱く親鳥のように、参加者である住民を（あるいは主催者をも）観察し続けなければならない。

★ ★ ★ ★

再び石川啄木に戻る。啄木は、宝徳寺という曹洞宗のお寺に生まれている。禅宗である。従って、17歳の啄木は、啐啄同時という言葉を理解していたはずである。そうならばと思い、先の記念館の学芸員に「早熟の天才啄木は、啄を待たずに殻を破り、上京してはじめて未熟を悟り、心病んで帰郷した。啄木には、梢から聞こえるカンカンというキツツキの音が、特別に響いたのではないか。あるいは、「啄」をしてくれる人を強く求めたのか。もしかしたら、後に結婚することになる掘合節子に、母鳥の温もりを求めたのではないか。そのようなことは、ありませんか。」と聞いてみた。すると、「そのように、啐啄同時とあわせて考えてみたことはありません。」というお答えだった。

(余談：石川啄木記念館の学芸員の方の話しぶりに癒されました。)